「自分を生きる」

産経新聞の「朝の詩」に次のような詩が掲載されていました。

　　みんなすごい
カイズカイブキもモッコクも
ツツジもシャクナゲもアジサイも
すごい
スズメもカラスものらネコも
ムカデもアリンコもダンゴムシも
みんなすごい
みんな「自分」を生きている

いささかユーモラスな詩ですが、なるほど、その通りだなと、頷かされるものがあります。
おそらくこの詩の作者は、何かのきっかけで、これまで何気なく眺めていた日常の風景を、改めて見つめ直したのだと思います。
すると、作者のその目に映ったものは、あらゆるものが懸命に「自分」を生きている姿でした。
その時、作者は「自分の生き方に比べ、みんな、なんと素晴らしい生き方をしているのだろう！」と、深い感動を覚えたのだと思います。
この詩にはそんな作者の生きることへの目覚めが伝わってきます。

ところで、この詩にある「自分を生きる」とはどういうことを言っているのでしょうか。

それは、「与えられた立場（境遇）を、我が身に引き受けて生き抜く」ということだと思います。

確かに、のら猫が「飼い猫になりたい」と愚痴をこぼしたり、松が「桜になりたい」と羨ましがったりはしません。
そういう事から言えば、あらゆる生き物は、それぞれ自分を生きています。

ところが、人間だけは与えられた立場（境遇）を中々引き受けようとしません。

「もう少しお金にゆとりがあればナー」「主人にもっと甲斐性があったらナー」「子供の出来がもう少し良かったらナー」「あの人さえいなければナー」等々・・・。
これでは到底「自分を生きている」とは言えません。

仏教では、私たちの世界は「因縁の道理」によって成り立っていると説いています。
それは例えば、朝顔は、タネという因に、土、水、太陽などの条件（縁）が整うことによって花が咲く（果）といったようなことです。

この因縁の道理を、私自身に当てはめてみるのです。

すると「今の私は、こうなるだけの原因（因）と条件（縁）があって、今の私になったのだ」という受け止め方が出来ると思います。
この因と縁を我が身に背負って生きていくことを「宿業を引き受ける」とか「宿業の自覚」と言います。

「自分を生きる」とは、このようなことを言うのです。

ですから、松や犬が自分を生きているというのは、夫々が自分の宿業を引き受けて生きているということが言えます。

親鸞聖人は晩年、「弥陀仏は自然（じねん）のようを知らせん料（りょう）なり」ということをおっしゃっています。

意訳しますと、阿弥陀仏という仏さまは「何事も、それは一切がそうならずにはおれない仕組み（因縁の道理）でそうなったのです、それをあなたの宿業として受けとめていきなさい。それが生きるという事の本来の姿です」と、時間と空間を貫いて働く因縁の道理を私たちに知らせようとする仏さまだということです。

その阿弥陀仏の呼びかけ（南無阿弥陀仏）にうなずく時「私の人生に何が起ころうとも、自分の人生は自分の責任において果たしていく」という主体性のある生き方が生まれてきます。

思えば、私たちの人生には「これしか道がない。こうするより他なかった」といったことが、いくらでもあります。
それを他人のせいにしたり、或いは運命とあきらめるのではなく、それさえも自分の責任として果たしていく。そうして「こうするより他に道がなかった」ところに「我が身の宿業の深さ」をかみしめていくのです。

このように「宿業を引き受ける」という事は、まことに厳しい現実ではありますが、それが、生きるという事の本来の姿に帰るということなのです。

その本来のあり方に戻って生きる時、ただ今、私がこうして生きているという事実が、すでに私を超えた働きの中にあるということが分かってきます。
「息をする、心臓が動く、空気がある、水がある、太陽がある」等々、何もかもが、私が生きるために、そうならずにはおれない道理で出来上がっていたのだなということが分かるのです。

それは「この宇宙すべてのものが私を生かし続ける仏さまだった」という目覚めです。

そこに、人間に生まれた喜びと尊さがあると思うのです。
念仏者、竹部勝之進は

タスカッテミレバ
タスカルコトモイラナカッタ

と、書き記していますが、まさに「我以外皆我諸仏」なのです。

平成１４年８月　「光明寺だより２３号」より